

IFS-GCORE 海外派遣プログラム 体験記

氏名	荒武 聖
所属/学年	医工学研究科 D2
指導教員	船本健一
研究課題	がん微小環境の再現および低酸素環境下におけるがん細胞の動態解明
派遣期間	2022.5.18-2022.11.18
派遣機関	Cancer Research Center of Lyon, Claud Bernard University Lyon1
受入教員	Nicolas Aznar

2023年5月18日から11月18日までの期間、フランスのリヨンにある Cancer Research Center of Lyon, Claud Bernard University Lyon1 に滞在しました。

リヨンはパリにつぐフランス第二の都市でありとても住みやすい町でした。研究室や買い物に行く際は地下鉄やトラム、バスなどの公共交通機関に加えレンタルサイクルも充実しておりリヨン市内のどこに行くのも移動に困るということはありませんでした。気候は安定しており基本的には住みやすい気候でしたが、住んでいた部屋に冷房がなかったため夏の暑い日はデパートや図書館に出かけていました。物価は日本に比べ少し高いものの果物や野菜などは安く自炊する分には困りませんでした。全体的に非常に住みやすく生活するうえで大きな問題はありませんでした。

今回の滞在では、Nicolas Aznar 教授の研究室に滞在し、がん細胞の塊（がんスフェロイド）とがん幹細胞に関する研究を行いました。この研究ではがんスフェロイドを酸素濃度やアミノ酸濃度を制御した状態で培養し、培養したスフェロイドの遺伝子発現を評価することでがん幹細胞の発現を調べることを目的としていました。滞在した研究室では生物学の専門的な知識や技術を持つ研究者が多く在籍しておりこれまでの学ぶ機会の少なかった専門的な生物学の知識と技術を学ぶことが出来ました。

6カ月間を通して自分と異なるバックグラウンドや異なるビジョンを持つ研究者と交流をできたことで多くの刺激を得ることが出来ました。また、文化や国の違う人と会話をする機会も多く様々な考え方に触れることが出来ました。特に1. 英語での研究に関する会話、2. フランス語での日常会話、3. 日本とフランスの文化の違いの3点については多くの気づきがありました。



リヨンの街並み



Nicolas Aznar 先生

1. 英語での研究に関する会話

フランスでのスーパーバイザーとの研究に関する会話は基本的に英語にて行っていました。インターンシップ開始当初は英語での会話に慣れないことによる実験手順の説明に対する誤解など、英語でのコミュニケーションにおける課題が多々ありました。インターンシップでの3か月を通して英語でのコミュニケーションは一定の能力向上が感じられましたが依然として言いたいことを正確に言えないこともあり、今後も英語の勉強は欠かせないと感じました。

2. フランス語での日常会話

研究に関する会話と違い日常会話ではフランス語での会話を要求される機会が非常に多くありました。報告者のフランス語能力は第2外国語でフランス語を履修していた程度であり、挨拶と簡単な単語を知っている程度のためフランス語が話せないことによる困難は数多くありました。研究室内行われていた自分を含まない会話は基本的にフランス語で行われているため会話に混じることができない、事務的な手続きはフランス語で説明されることが多いため英語の話せる人に助けをもらったり、翻訳機を使ったりすることが多くありました。これらの経験から、その国の言語を最低限理解できる必要性を強く感じました。

3. 日本とフランスの文化の違い

フランスではインターンシップ前にイメージしていた通り、日本より私生活を大事にすることが強く感じられました。平日は夕方7時には研究室から人がいなくなり休日は基本的に実験室が締まっており、決められた時間に集中して仕事を終わらせている点は学ぶべき点だと思いました。また、インターンシップ期間にフランスでのバカンス期間である8月が含まれていました。申請者はバカンスをとらなかったが研究室内の全員が1か月程度のバカンスをとっており（ほかの研究室では研究室自体が完全に閉鎖されることもあると聞いた）、バカンスをとらないことについて稀有なまなざしを向けられたことは文化の違いを強く感じました。

これらの貴重な経験を今後の研生活や今後の人生に生かしていきたいと思います。このような貴重な機会を与えてくださったIFS-GCOREの皆様、指導教官である船本健一先生、研究及び慣れない環境での生活のサポートをしていただいたNicolas Aznar先生やCRCLの皆様をはじめとした本インターンシップの関係者の方々に深く感謝いたします。